

宮沢賢治詩集『春と修羅』の精神基盤

汐崎 亮子

詩集『春と修羅』は、大正十三年四月に自費出版で刊行された宮沢賢治の生前唯一の詩集である。今回は、この詩集『春と修羅』の精神基盤について、筆者の卒業論文をもう一度より振り返りながら再考してみる。

賢治はこれらの詩を「序」で、へそのとほりの心象スケッチです」と言ったように、「心象スケッチ」と呼んでいる。が、この「心象スケッチ」は賢治にとって、単に「詩」という言葉の代用ではなく、一貫した賢治の創作態度なのである。「心象スケッチ」とは、その時、心に浮かんだ風景をそのとおりにスケッチする事であり、童話集『注文の多い料理店』の新刊案内に、「……この話集の一列は、作者の心象スケッチの一部である。……（中略）……これらはけっして偽でも架空でも窃盗でもない。多少の再度の省内と分析とはあってもたしかにこのとおりその時心象の中に現れたものである。ゆえにそれは、どんなに馬鹿けていても、甦解でも必ず心の深部において万人の共通である」とあるように、

童話、詩等の区別なく、賢治の創作理念でもあるのだ。さてこの心象スケッチの一列、「春と修羅」第一集は、大正十一年一月から、大正十二年十二月までの二年間に書かれた詩を集めている。この頃までの賢治のことを簡単に述べておこう。

宮沢賢治は、明治二十九年八月二十七日、岩手県稗貫郡花巻町に、当時、賀・古着商を営んでいた宮沢家の長男として生まれた。東北岩手は、その地理的条件から何度も冷害を被り、度々大凶作となった。貧しい農民の姿を幼少時から見てきた賢治は、その貧しい農民を相手にわずかばかりの金を貸す質屋という家業を継ぎ嫌っていた。また賢治の興味は周囲の人に「石コ賢さん」と呼ばれる程、石やまた植物、昆虫、星等にむけられ、盛岡中学時代になると、それらとともに、文学に傾き、商売の才能など無い自分が、嫌いな家業を長男として継がねばならないのかと、悶々と暮らしていたのである。やがて、盛岡高等農林学校、農学科第二部（農芸化学）へ進んだ賢治は、二年生になっていよいよ文学的な活動を始める。学友との同人誌「アザリア」が主要な活動である。

そして三年、卒業の時期を迎えて、卒業後の職業について賢治は度々父親と対立する。父親とは、職業上の問題のみならず、信仰上でも対立してしまう。宮沢家は代々浄土真宗を信仰してきたが、賢治は十八歳の時、島地大等編著『国訳妙法蓮華経』を読んで以来、法華経を信仰しており、ここでも父と子の意見がくい違ふ。

このような対立の中で、賢治は高農の研究生となり一応落ち着くが、様々な問題をかかえて暗い日々を送った。そんな中で、日本女子大に在学中の妹トシが病気で入院し、賢治は母親とともに上京し、熱心な看病をする。その間賢治は様々な職業を提案し、調べ、父に伝えるが全て賛成の意を得られない。帰花後は、研究生としての仕事も少なくなり、質屋の店番をすることを余儀無くされ、憂鬱な日々はなお続く。法華経への傾倒はますます強く、国柱会信仰部に入会し、花巻の町を唱題しながら歩くなどした。ついに賢治は大正十年一月、二十五才の時家出をし、国柱会を訪れる。が、生業をもつて大衆に教えをひろめるのが純正日蓮主義の信仰であると説かれ、一心に創作活動を行う。この時、初期の童話が数々書かれた。が、父の直参にも帰花の意志をもたなかった賢治であったが、八月中旬、トシ病気の知らせに、賢治は、トラシク一杯の原稿を抱えて帰花する。そして十二月には、磐城農学校の教師という職を得る。翌大正十一年一月より、「屈折率」を初めとして、後に『春と修羅』に収められた詩群が次々と書かれ始めるのである。これまでの賢治の創作活動は短歌と童話等であ

ったが、大正十年冬以来、詩の習作「冬のスケッチ」を経て、詩作が始まる。こうした背景の中で、『春と修羅』は書きつづられてゆく。

この詩集『春と修羅』を形成している精神基盤を考えてみたい。

二

まず初めに、賢治詩のみならず彼の作品全体を通してその最も重要な支柱となっているのは、「宗教」、つまりここでは法華経信仰ということである。先に述べたように、賢治は十八歳の時、法華経に出会った。そして家出した先の国柱会で、生業を通じて大衆に教えをひろめ法華経の精神を生かせとさとされ、一念発起、法華文学としての童話を書き始めている。そして当詩集にもその精神は脈うっているのである。狭く法華経の影響、とだけ考えるのではなく、浄土真宗の檀家として仏教色の濃かった家で育った賢治は、幼少時から仏教的な雰囲気や日常的に体得しており、広く宗教との関わりとしてみてゆきたい。

まず詩集の題名にも使われた「修羅」という言葉であるが、賢治はかなりこの言葉に執着していた。それは、詩集名にも、詩章名にも、詩篇名にも使われており、また未刊ではあるが、「春と修羅第二集」、「春と修羅第三集」等と後の詩集名にも使っている。「修羅」とは仏教で、一切衆生が善惡の定めによって、死後必ず行くという六つの世界、即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間

・天上という六界の一つで、そこは現世で戦争をした者や慢心猜疑心の強い者が死後おちる所であり、常に闘争をこととする、という。詩中では、へ心象のはひいろはがねから／あけびのつるはくもにからまり／のばらのやぶや腐植の湿地／いちめんのいちめんの詠曲模様（正午の音楽よりもしげく／琥珀のかけらがそぐとき）／いかりのにがさまた背き／四月の気層のひかりの底を／唾しはぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ、へああかがやきの四月の底を／はぎしり燃えてゆききする／おれはひとりの修羅なのだ（「春と修羅」）、へわたくしの影を見たのか堤灯も戻る／（その影は鉄いろの背燈の／ひとりの修羅に見える筈だ）（「東岩手火山」）、へああ巨きな情のちからからことさらにはなれ／また純粹やちひさな徳性のかずをうしなひ／わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき（「無声痛哭」）等とある。賢治は自分を修羅と呼んだ。歯ざしりしながら怒りに燃える修羅、と。修羅は、純粹、徳性、信仰といったものの反対のところにある。賢治は、職業問題に悩み続け、又身体の不調や父との信仰上の対立から憂鬱な日々を送っていた。また「禁欲」をよしとする賢治の性欲との戦い、「家」や「風土」の中でのしがらみ、自分の思いのままに生きられないいらだち等、修羅意識の背景はいろいろ考えられる。その中には「恋愛」という問題も含まれる。大乘仏教では、広くあらゆる人の幸福を願う。へもしも正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といつしよに／至

上福祉にいたらうとする／それがある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまたは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする／この変態を恋愛といふ／そしてどこまでもその方向では／決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を／むりにもごまかし求め得ようとする／この傾向を性慾といふ（「小岩井農場パート九」）とあるように、賢治は一個人を愛するのではなく、全てのものを愛する事を、宗教愛として最上のものと考えている。あらゆる人の幸福を願ひ、宗教愛に生きようとし、かたくなに禁慾生活を守り恋愛も否定していた賢治であったが、それでもやはり女性にひかれ、実際に恋愛感情も抱き、そのような人間的な感情と宗教性の間で苦悩するのである。そしてそういう相克から脱出しようとするのだが、あえぎ苦しんで地をほう。これもへ歯ざしり燃えてゆききする／修羅の一面であらう。「修羅」と相対的に描かれるのは「春」である。へかがやきの四月へ、へれいろうの天の海には／聖玻璃の風が行き交ふ「春」という「天」の状態である。仏道に徹した、純粹で徳性に満ちたことの幸福の状態である。「修羅」は、「春」を恋し続けながら、己の怒に満ちた心をもて余し、涙しつゝ、へかがやきの四月の底へを徘徊するのである。

さて、法華經の思想の一つに、一乗妙法と呼ばれるものがある。これはもろもろの事物ないし諸法は、相・性・体・力・作・因・

縁・果・報・本末究竟等という十個の「存在のしかた」によって支えられ、それぞれ独立、固定したのではなく、あい依り、あい関係し合つて生成、変化しているものだという宇宙の統一的真理のことである。全てのものは、互いに関係し合つて成り立っているという考えは、『春と修羅』の「序」の底流をなしているように思う。へわたくしといふ現象は／仮定された有機交流電燈のひとつの背い照明です／（あらゆる透明な幽霊の複合体）／風景やみんなといつしよにせはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにとりつづける／因果交流電燈のひとつの背い照明です。賢治は自分を（現象）といい、へひとつの背い照明」ととらえているが、それは単に（電燈のひとつの背い照明）ではなく、へわたくしといふ現象は、独立したのではなく、他のものと様々にかかり合い様々な諸物の原因、結果等が入り交つて生じた、（因果交流電燈）なのである。賢治は自己を一つの現象と見宇宙のわずかのところに明滅する照明だというふうに非常に客観的に自己をみている。また、諸仏は変化流動するというのは、仏教の基本的な思想であるが、多くの人は、変化という真理をどこかに置き忘れてゐる。そして一瞬の間にも変化する万象を「変わらぬ」と感じてゐる。しかし自分をも「現象」ととらえる賢治は、常に「変化する」ということを意識している。この世の何もかも、一ところに留まることはない。それは一人の人間の経済力であるとか、健康であるとか、才能とても例外ではない。印刷さ

れた言葉の相立や質も、また記録や歴史、地史等も巨大な時間の中で変化してゆく。が賢治は、不変でないことに失望するのではなく、へなにもかもみんなたよりなく／なにもかもあてにならない（「過去情炎」）と言いつつ、そのたよらない性質が、きれいな露や、虹を作ったり、神秘的なまでに美しい自然の景観を生み出すことに感動するのである。へそれよりもこんなせはしい心象の明滅をつらね／すみやかなすみやかな万法流転のなかに／小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が／いかにも確かに継起するといふことが／どんなに新鮮な奇蹟だらう（「小岩井農場パート一」）、と賢治は万法流転ということ、諸物の変化ということを強く認識し、それを受け入れている。

ところで彼は、大変に作品の推敲の多い人で、多くの手直しをする。それは大変なもので、印刷され、本になったものにも行なわれる。有名な童話「銀河鉄道の夜」は、四次稿まで考えられ、非常に手直しがなされていることでも知られている。「農民芸術概論綱要」の結びに、「永久の未完成これ完成である：畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考があるのみである」と記されているが、自分の作品や考えも当然賢治にはたよりない現象の一つであり、流動的なものととらえているのである。そして、へそしてこれらもろもの徳性は／善逝から来て善逝に至る（「昂」）というように、これらの変化流動する性質をもつ万象の根源は、「善逝」だという。（「善逝」は仏のことで、十尊の一つである）

「又、この眼の前の、美しい丘や野原も、みな一秒づつづつづれたりくづれたりしてゐます。けれども、もしも、まことのちらが、これらの中にあはれるときは、すべてのおとろへるもの、しむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないのちです。」（「めくらぶだうと虹」）、へゝわたくしがその耳もとで／遠いところから声をとつてきて／そらや愛やりんごや風／すべての勢力のたのしい根源／万象同帰のそのいみじい生物の名を／ちからいっぱい叫んだとき／あいつは二へんうなづくやうに息をした（「青森挽歌」）等と言っている。すべての勢力のたのしい根源万象同帰のそのいみじい生物の名とは即ち「南無妙法蓮華経」という題目である。賢治は病床にあるトシに、寝たまま手を合わせ、ナムミョウホウレンゲキョウと唱えさせていたという。そして臨終の際その耳元で題目を力いっぱい叫んだのだ。「生物」というように賢治は、法華経を、生命力、万象の根源となるエネルギーとみていた。法華経の思想には、因果不二、真理一体といつて目前の小事の中に宇宙の真理が現われており、宇宙の真理というような大きなことも、目前の小さな現象と本質は一つであるという思想である。（久保田正文「法華経について」より）。諸々の事物は互いに相関し合つて存在しており、その諸々の事物、現象はそのまま、宇宙の真理、永遠にして最高の実体を現わしているということだ。そしてその宇宙の真理を悟った仏は、賢治が「法華経」の中でも特に熟読した「如来寿量品第十六」の

おしえによると、仏の寿命は永遠であるという。死とか生とかは仮にそう表現されたにすぎず、仏の命は永遠のものである。つまり一秒づつづつづれたりくづれたりしている眼前のたよりない現象も、法華経を信じ、そこに宇宙の真理があると考えられれば、たつた三秒の虹でも、かぎりない命を得ることができるのである。変化し、常に留まる事のない世のすべてのものはかんで、あてにならないと否定するのではなく、賢治はそこに諸物の存在のし方を見、仏を感じている。

また菩薩道については、賢治も後に菩薩とまで言われるまでに農村の向上のために骨身をけずつて実践活動を行つたりした。そのきざしは詩篇「鎔岩流」のへあれがぼくのシャツだ／背いリンネルの農民シャツだにみえる。賢治への法華経の影響というのはもちろん、この社会実践という面に強く現われているだろう。法華経では諸々の事物、現象はそれ即ち宇宙の真理（金剛・本体）の現われというが、そうすると例えば一つの石ころと一人の人間もある意味では同じ、平等なものである。というのは、石と人間では、生命体と非生命体、形、重き等々共通点など無く、相違点だらけであるが、両方共「現象」であり、それらは「妙法蓮華経」という生命の根源力によつて現われているのであるから、そういう意味でいえば石も人間も同じものである。そう考えると、序文の中で、「銀河」という巨大なものから、「海胆」という微小な

ものへ視点が飛躍するのも頷けるのだ。彼の心象宇宙では、シヤカ仏が、過去から未来に亘って久遠の命をもつように、時間や歴史をも超えてしまえるのだ。

三

次に、彼の詩と自然、という事についてふれてみたい。初めに詩集を通して気づく事は自然に関する語が非常に多い事である。東北の地で生まれ育ち、小さい頃から鉱物・植物・昆虫を採集したり、農学校では、農学科に籍を置き、地質学、化学等々を学び、自然科学にも専門家であった賢治にとっては当然の事ではある。まず、自然現象、気象の言葉が多い。「雲」は約一二〇回、「風」は約五十回、そして「空」、「雨」、「雪」、「霧」等が頻出する。他に「月」、「日」、「星雲」といった天文語、植物、動物、鉱物関係の言葉が多く使われる。こういう類の言葉の多さは賢治の特色の一つでもある。自然科学が専門であったせいもあるが、どんなに賢治が自然とともにへ明滅していたかがわかる。賢治と自然の関係はというと、時にはへ松毛虫に食はれて枯れたその大きな山に／挑いろいろな日光をもそそ／すべて天上技師の如き氏の／ごく斬新な設計だ（「樺太鉄道」）等と親しい友人のようであったり、独特のユーモアをもって描かれたり、或いは（「お日さまは／その遠くで白い火を／どしどしお焚きなさいます」（「丘の眩惑」）と敬意をもって描かれ、大いなる自然に対して

敬虔な人間であつたりする。

ところで、賢治の創作方法というのは、これまで多くの人が言つて来たが、彼は常に手帳、或いはスケッチブックと鉛筆、もしくはシャーペンシルを持って、山野を歩きまわり、野宿もし、その間に目に触れた事物、心に浮かんだ事を非常なスピードでスケッチしていく、というものだったという。もち論そのスケッチがそのまま完成作品になるのではなく、これが又賢治の一つの大きな特徴であるが、その後烈しく推敲され、しばしば「推敲」の域を出る程の手入れもほどこされる。が、最も基本的なその詩の精神というのは山野の歩行中にスケッチされる。「春と修羅」中、その作品の場面が屋内であることは少なく作品中の賢治は、草地の上に寝ていたり、歩行中であつたり、また汽車の中であつたりする。野や山で自然に触れながら心に浮かぶ心象風景を、そのとおり書きとつてゆくのである。結果的にそれが多少の再度の反省・分析を経たものであつても、その詩の精神の誕生の瞬間には、賢治は自然の中に在る。

また禁欲生活をしていた賢治は、その性欲を抑えるため、自然の中へ飛び出した。「昨日の夕方出かけていって、一晚中牧場を歩き今帰った所です。性欲の苦しみはなみたいていではありませんね」、「おれはたまらなくなると野原へ飛び出すよ。雲にだって女性はいるよ」等と、友人達に語っている。野原や、雲や風が、性欲を昇華させてゆく。或いは、へこんなあかるい穹窿と

草を／はんにちゆつくりあることは／いつたいなんといふおんけいだらう」（「一本木野」）、へ大きな帽子をかぶつて／野原をおぼらにあるけたら／おれはそのほかにもうなんにもいらない」（「火薬と紙幣」）というように、自然の中に解き放たれた時が何よりも幸福であり、最も生き生きとしている時であり、その時、詩人としての心が「自然」と共鳴し合うのだ。詩篇「林と思想」では、へそらね、ごらん／むかふに霧にぬれてゐる／叟（おきな）の私たちのちひさな林があるだらう／あすのことこへ／わたしのかんがへが／ずるぶんはやく流れて行つて／みんな／溶け込んでゐるのだよ」と、賢治のへかんがへんが、へ林と一つになっている。自然と一つになること、その中で賢治はより自己をとり戻す事が出来たのではないだろうか。ほかに賢治は、へサガレンの朝の妖精にやつた／透明なわたくしのエネルギーを／いまこれらの澗のおとや／しめつたにほひのいい風や／雲のひかりから恢復しなければならないから」（「オホーツクの挽歌」）、「農民芸術概論綱要」では「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」、「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」「風とゆきまし　雲からエネルギーをとれ」という。無方の空にちらばらう、と宇宙にわけ込もう、自然と一体になろうとしながら、風とゆきまし雲からエネルギーをとれと、自分の内にとり込もうとする。こうした宇宙との交感、一体感の底流には何があるのか。大正十四年七月十

九日作の「種山と種山ケ原」という詩のパート三では、へあゝ何もかももうみんな透明だ／雲が風と水と虚空と光と核の塵とでなりたつときに／風も水も地殻もまたわたくしもそれとひとしく組成され／じつにわたくしは水や風やそれらの核の一部分で／それをわたくしが感ずることは／水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ」という。「雲」も「わたくし」も表向き現象は違つても、元は水や風や光といったもので成り立っており、等しいものである。風も水も光も「わたくし」であり、「わたくし」は風であり水であり光である。それは、動物にも植物、鉱物にも言えることである。つまりそこに、万象は等しいという仏教の精神があり、自然とわたくしとはひとつなのだと認識することによってより仏の心、万象の根源である本体、宇宙の真理というものに触れられるのではなからうか。自然との一体感はその前段階に、自然と人間との宗教的平等感があり、美しい風景に、また壮大な自然現象に、仏を見いだし、それら自然と溶け合おうとすることで、「すべての勢力のたのしい根源」＝法華經により近づくことであると言えよう。自然と交感し一体になろうとするその底には、賢治の「妙法蓮華經」信仰が働いているように思う。

また、因果不二、真理一体、眼前の現象というものは、即本体、真理の現われであり、それ故に外觀が違つても、本質は等しいものである。諸物は因縁でもって相関係し合つて生成変化する。（雲）もへわたくし）も、風と水と虚空と光と核の塵というわず

かな基礎的なものの、組み合わせの仕方によって現れた現象にすぎない。このような宗教的な認識のもとに、銀河系という巨大なもの、個人或いは海胆や蟻のような微小なものも等しいものとして同じように位置づけられることが可能なのだ。へ太陽系の春だへへ気圏日本へ等といった、賢治の宇宙感覚の奥底には、宗教的な世界観があり、またそれ故に賢治はやすやすと宇宙と交感してみせるのである。

四

最後に、妹トシへの愛ということについて述べたい。宮沢トシは、賢治とは二つ違いのすぐ下の妹である。明治三十一年十一月、賢治に次いで宮沢家の長女として生まれた。成績優秀で大正四年には日本女子大学に入学するが、大正七年、チフスマがいの病のために東大病院小石川分院に入院、賢治の看護を受ける。大正八年、大学の最終試験は受けられないまま花巻に帰るが、成績が良かったため卒業を認められた。その後、花巻高等女学校に勤めるが再び病に倒れる。そして家族の看護にもかかわらず大正十一年十一月二十七日、二十四歳になったばかりで永眠した。

詩集中、賢治は、度々こんな事を言っている。へいまこそおれはさびしくない／たつたひとりで生きて行く／こんなさままたましひと／たれがいつしよに行けようかへ、へもうけつしてさびしくはない／なんべんさびしくないと云つたところで／またさびし

くなるのはきまつてゐる／けれどもここはこれでいいのだ／すべてさびしさと悲傷とを焚いて／ひとは透明な軌道をすすむへ（「小岩井農場パート四、パート九」）等、たった一人でこの人生を生きてゆこうと。けれども私達は容易に察せられる。賢治がいかに、「一緒に進んでゆく」魂を求めていたかを。賢治には、農学校時代の親友に、保阪嘉内という人がいた。法華経を信仰し、日蓮主義の国柱会に入会した賢治は、彼に何度も日蓮門下になることを勧めたが、結局は同じ信仰の道に歩めず、彼と決別してしまった。賢治にとって「誰かと一緒に進む」ということは悲願であったように思う。さびしくないさびしくないと、一人で進んでゆこうという賢治だがやはりさびしく、一緒に行ってくれる魂を求めている。そんなさびしい賢治にとって、唯一のみちづれたりえるのが、妹トシだった。トシの死に際して「永訣の朝」、「松の針」、「無声慟哭」という挽歌三部作がうたわれた。詩集「春と修羅」は違った方向へ歩み出す。「無声慟哭」で、へ信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが／あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて／毒草や螢光菌のくらしい野原をただよふとき／おまへはひとりどこへ行かうとするのだと叫ぶ。代々浄土真宗を信仰する家の中で、妹トシだけが彼と同じ法華経の道を歩いていた。そしてその妹が死の床にいる時、賢治は己と信仰を共にする者に対して励ましてやる事ができない自分に苦悩する。トシはへ（おら おかないふうしてらべ）へ、へ（それで

もからだくさえがべ?」(無声慟哭)と尋ねる。母は(うんにや ずるぶん立派だちやい/けふはほんとに立派だちやい)と答えるが、賢治は何にも答えられない。(青ぐらい修羅を歩いてゐる)賢治は、純粋で、善である妹にへほんたうにそんなことはない/かへつてこはなつののはらの/ちひさな白い花の匂でいつぱいだから)と言ってやれない。自分も純粋に信仰に徹していれば、同じ法華經を信仰するトシは、肉体が減する死という現象を通してこの世から無くなつても無上道に成仏し、天に生まれ永遠の命を得るのだと信じられるのに、人間として、兄としての感情がどうしてもトシの死を受けとめかねるという二つの心の葛藤、宗教性と人間性の間で板ばさみの状態になっている。

へおまへはじぶんにさだめられたみちを/ひとりさびしく往かうとするか、へおまへはひとりどこへ行かうとするのだ)と問いかける賢治は、以後トシの行方を追つて心の旅を続けることになる。挽歌三部作以降半年間賢治の創作活動はとまつてしまう。そして次に続く挽歌では、トシをさがし求める賢治の姿が浮きぼりにされるのである。

大正十二年八月、賢治は教え子の就職依頼のため、樺太・北海道を旅行する。真の動機は、妹の死について改めて考え直してゐる事、「死んだ」という妹の行方を追求することだったという。

トシの死はその後の賢治の作品にもかなり強い影響を与えており、代表作の一つである童話「銀河鉄道の夜」を成立させたと考え

えられる。この「銀河鉄道の夜」は成立までにいくつものものになった作品があるが、その最も関係の深いものは「青森挽歌」である。青森行きの夜汽車に乗り、車中トシの死について様々な想いをめぐらせている。この旅ではトシは一体どんな世界へ行ったのかを考えることが賢治の一つの課題であった。夜の空を見れば木星の上に、鳥を見れば鳥に、雲を見れば雲の中に、賢治はトシの姿を見出そうとする。法華經を信仰する賢治にとってトシの行方を案じる事は、己の信仰に迷いを感じている事であった。法華經がへそらや愛やりんごや風 すべての勢力のたのしい根源/万象同帰のそのいみじい生物)であるなら、同様に法華經を信仰したトシは、死んだ後は必ずや天に生まれ、無上道に達するはずである。だが実際に自分の最も身近な者の死にあった時、どうしてもその者の行つた先が気になつて仕方がない。果して本当に天に行つたのか。即ちそれは、自分達の信ずる法華經が本当に正しい道なのか、という疑問である。死んだトシは、光あふれる幸福なところにいるのか、それとも地獄のような不幸な地であるというのか。同時期に書かれた「宗谷挽歌」(詩集には収められていない)で、へとし子、ほんたうに私の考へてゐる通り/おまへがいま自分のことを苦しめないで行けるやうな/そんなしあわせがなくて/従つて私たちの行かうとするみちが/ほんたうのものではないならば、へわれわれが信じわれわれの行かうとするみちがもしまちがひであつたなら/究竟の幸福にいたらないなら)と言

うように、これまで自分の全生活を支えて来た法華經の信仰が、初めて賢治の心の中で揺らぎ、絶対的に信仰に徹するということが出来ないのである。

法華經は、大乘仏教の經典の一つである。大乘仏教は全ての人を救済しようとするもので菩薩信仰をよりどころとしている。賢治も個別的な愛ではなく、もっと広い愛をめざしていたことは、先に述べたとおりである。従って亡くした妹の行先が、幸福な世界であるか不幸な世界であるか等とばかり考えていると賢治の心の中で、《みんなむかしからのきやうだいなだから／けつしてひとりゐのつてはいけない》（「青森挽歌」）という声も聞かえてくるのである。盲目的、個別的な愛、とりわけ恋愛、性愛を否定していた賢治であるが、一方では、へ正しいねがひに燃えて／じぶんとひとと万象といつしよに至上福祉にいたらうとする／同じ魂を懸命に求めており、初めはそれを友人保阪嘉内に求めていたが挫折し、結局たつたひとりと、トシの魂が賢治と一緒に進んで行けるものであったのだ。へじぶんとひとと万象といつしよに／至上福祉にいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまたは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする／この変態を恋愛といつた賢治にとって、妹トシは万人のへ至上福祉へに至らうとする上で、へ完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとするへたつたもひとつのたましひで

あったのである。そのような賢治の唯一の同感者であったトシの死は賢治の作品に大きな影響を与えた。本格的な詩作が始まって一年たたないうちにこの事件が起こり、詩集「春と修羅」では挽歌がうたわれる事になり、賢治作品の中で最も高い評価をうけるものの一つとなった。またトシの死をモチーフにした童話も多く生まれた。賢治作品の中で私達は、「みんなの、すべての生き物のほんたうの幸福をさがす」という言葉にしばしば出会う。これはトシの死を経てより強く語られていくようだ。「農民芸術概論綱要」で、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「われらは世界のまことの幸福を索ねよう、求道すでに道である」といっているように、みんなの幸福を求める、いわゆる菩薩道に入つてゆく。その一つの転機がトシの死という重大事件であり、北海道・樺太旅行での深い思索であつたろう。

賢治のトシへの愛情は深く、大正八年トシ入院の際、賢治の献身的な看護の様子は有名だ。賢治にとってトシは、ついに同感者たり得なかった友人保阪嘉内に代れる。友人であり、否定してきた「恋愛」というもののもう一つの側面、へ完全そして永久にどこまでもいつしよに行へく、という点で、恋人であったかもしれない。

五

今回、賢治の詩集「春と修羅」の精神基盤として、法華經、自

